

殿の前の堀を淺草へほりつゝけて、其土を以て土堤をつかれて、内外の隔出來て、こなたを駿河台と名付たり、其後に又陸奥守へ被仰付て、いよく其堀を深くせられし也、觀世やしきも他所へ引うつされて、その跡にやしきわり渡して、猿樂町の名残りといふ、某問ふ、さては今の牛込御門の前の堀も、其時に出來しやと問ふに、牛込前の堀の事、いまだしらす、龍慶橋筋の水を江戸川といひしは、平川へ落合ふをふさぎて、淺草川へ落す事は、前にいふがごとく承りたりといふ也。

按ずるに、ふるき人のいひしは、長野治右衛門芝口の町も京橋邊迄にて、それよりこなたは後に出來し也、これによりて京橋邊の町の名に、今も大坂町住吉町などいふあり、これはその所に傾城町有し也、中頃、今の境町へそれをうつされ、丁酉^{○明曆}火事後、又今の新吉原へうつされたり、されば京橋邊よりして、日比谷門の邊迄は、海入込たり、これによりて今の芝口の邊井上玄徹やしき前むかしの肴市場故に、今も市たつなり、又今の日比谷門のあたりも、町屋なるを、後に武士やしきになされし故に、町は引移されて、日比谷といふ町有、今の門よりは大きに程へだ、りたり、今の日比谷のあたりを、陸奥守の地を築たてしといふは、その海邊を築たてし也といふ、又伊賀衆より出し書付を見るに、寛永の初迄は、赤坂の邊糺町邊は、伊賀衆の知行所の田地なるを他所へ引うつされ、ため池をほられて、其土をば今の安藝守の屋敷などの臺となり、それより堀をほり廻されしといふ也、さらば牛込などをつゞけられしも、其時に出來しなるべし、淺草橋御門は、越前の宰相殿の御承りなりきと、越前衆のいふ也、これは今の松平中務の屋敷は、もと上總介殿の御やしきを、後に越前の下やしきに被下候故、屋敷近くの故なるべし、又重羽いふ、今の靈巖島は、母方の祖母の旦那の靈岩寺の雄譽の望給ふて、島をつきだせしといふ、按ずるに、此靈岩島は、右にゑるす京橋よりこなたの地をつかれて、後には、町堀